木曽の最期

木曽左馬頭、その日の装束には、赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧着て、鍬形打つたる甲の緒締め、いかもの作りの大太刀はき、石打ちの矢の、その日のいくさに射て少々残つたるを、頭高に負ひなし、重籐の弓持つて、聞こゆる木曽の鬼葦毛といふ馬の、きはめて太うたくましいに、黄覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。鐙踏ん張り立ち上がり、大音声を上げて名乗りけるは、

「昔は聞きけんものを、木曽の冠者、今は見るらん、左馬頭兼伊予守朝日の将軍源義仲ぞや。甲斐の一条次郎とこそ聞け。互ひによい敵ぞ。義仲討つて兵衛佐に見せよや。」

とて、をめいて駆く。一条次郎、

「ただ今名乗るは大将軍ぞ。あますな者ども、もらすな若党、討てや。」

とて、大勢の中に取りこめて、我討つ取らんとぞ進みける。木曽三百余騎、六千余騎が中を縦さま、横さま、蜘蛛手、十文字に駆け割つて、後ろへつつと出でたれば、五十騎ばかりになりにけり。そこを破つて行くほどに、土肥二郎実平、二千余騎で支へたり。それをも破つて行くほどに、あそこでは四、五百騎、ここでは二、三百騎、百四、五十騎、百騎ばかりが中を駆け割り駆け割り行くほどに、主従五騎にぞなりにける。五騎がうちまで巴は討たれざりけり。木曽殿、

「おのれは、疾う疾う、女なれば、いづちへも行け。我は討ち死にせんと思ふなり。もし人手にかからば自害をせんずれば、木曽殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりなんど、言はれんこともしかるべからず。」

とのたまひけれども、なほ落ちも行かざりけるが、あまりに言はれ奉つて、

「あつぱれ、よからう敵がな。最後のいくさして見せ奉らん。」

とて控へたるところに、武蔵の国に聞こえたる大力、恩田八郎師重、三十騎ばかりで出で来たり。巴、その中へ駆け入り、恩田八郎に押し並べて、むずと取つて引き落とし、わが乗つたる鞍の前輪に押しつけて、ちつともはたらかさず、首ねぢ切つて捨ててぞ行く。手塚太郎討ち死にす。手塚別当落ちにけり。

今井四郎、木曽殿、主従二騎になつてのたまひける、

「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや。」

今井四郎申しけるは、

「御身もいまだ疲れさせ給はず。御馬も弱り候はず。何によつてか、一領の御着背長を重うはおぼしめし候ふべき。それは御方に御勢が候はねば、臆病でこそさはおぼしめし候へ。兼平一人候ふとも、余の武者千騎とおぼしめせ。矢七つ八つ候へば、しばらく防ぎ矢つかまつらん。あれに見え候ふ、粟津の松原と申す。あの松の中で御自害候へ。」

とて、打つて行くほどに、また新手の武者五十騎ばかり出で来たり。

「君はあの松原へ入らせ給へ。兼平はこの敵防ぎ候はん。」

と申しければ、木曽殿のたまひけるは、

「義仲都にていかにもなるべかりつるが、これまで逃れ来るは、なんぢとひとところで死なんと思ふためなり。ところどころで討たれんよりも、ひとところでこそ討ち死にをもせめ。」

とて、馬の鼻を並べて駆けんとし給へば、今井四郎、馬より飛び降り、主の馬の口に取りついて申しけるは、

「弓矢取りは、年ごろ、日ごろいかなる高名候へども、最後のとき不覚しつれば、長ききずにて候ふなり。御身は疲れさせ給ひて候ふ。続く勢は候はず。敵に押し隔てられ、言ふかひなき人の郎等に組み落とされさせ給ひて討たれさせ給ひなば、『さばかり日本国に聞こえさせ給ひつる木曽殿をば、それがしが郎等の討ち奉つたる。』なんど申さんことこそ口惜しう候へ。ただあの松原へ入らせ給へ。」

と申しければ、木曽、

「さらば。」

とて、粟津の松原へぞ駆け給ふ。

今井四郎ただ一騎、五十騎ばかりが中へ駆け入り、鐙踏ん張り立ち上がり、大音声上げて名乗りけるは、

「日ごろは音にも聞きつらん、今は目にも見給へ。木曽殿の御乳母子、今井四郎兼平、生年三十三にまかりなる。さる者ありとは、鎌倉殿までも知ろしめされたるらんぞ。兼平討つて見参に入れよ。」

とて、射残したる八筋の矢を、さしつめ引きつめさんざんに射る。死生は知らず、やにはに敵八騎射落とす。その後打ち物抜いて、あれに馳せ合ひ、これに馳せ合ひ、切つて回るに、面を合はする者ぞなき。分捕りあまたしたりけり。ただ、

「射とれや。」

とて、中に取りこめ、雨の降るやうに射けれども、鎧よければ裏かかず、あき間を射ねば手も負はず。

木曽殿はただ一騎、粟津の松原へ駆け給ふが、正月二十一日、入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたりけり、深田ありとも知らずして、馬をざつとうち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。あふれども あふれども、打てども打てどもはたらかず。今井が行方のおぼつかなさに、振り仰ぎ給へる内甲を、三浦の石田次郎為久、追つかかつてよつぴいてひやうふつと射る。痛手なれば、真向を馬の頭に当てて、うつぶし給へるところに、石田が郎等二人落ち合うて、つひに木曽殿の首をば取つてんげり。太刀の先に貫き、高くさし上げ、大音声を上げて、

「この日ごろ日本国に聞こえさせ給ひつる木曽殿をば、三浦の石田次郎為久が討ち奉つたるぞや。」

と名乗りければ、今井四郎いくさしけるが、これを聞き、

「今は誰をかばはんとてか、いくさをもすべき。これを見給へ、東国の殿ばら、日本一の剛の者の自害する手本。」

とて、太刀の先を口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける。さてこそ粟津のいくさはなかりけれ。

（巻九）